

をしていたマサンの高校生たちも、じっと劇に見入り、「ヨンヒ！（妹の名前）」と叫ぶ主人公の姿は、多くの韓国の女性観客の涙をさそった。

日韓文化交流

今回の馬山国際演劇祭における日本の演劇公演は、韓国における文化開放政策の一環である。韓国では、98年10月にキム・デジュン（金大中）大統領が「日本文化の開放」を正式に表明して以来、韓国において、日本の大衆文化のうち、映画・ビデオ・出版などの間放が始まり、続いて歌謡曲・アニメーションなどの開放が始まった。演劇の開放もこの流れに沿ったものである。

まず映画では、98年、北野武監督の映画『HANA-BI』が韓国における日本映画の輸入第1作となり、映画『Love Letter』などのヒットを経て、2000年の5月からは、映画『Shall we ダンス?』がソウルなどの都市で大ヒットしている。また音楽においては、98年、韓国で沢知恵が初めて日本語の歌をコンサートで歌うこと許可されたのを機に、99年にはキム・ヨンジャが美空ひばりなどの歌謡曲を初めて韓国のコンサートで歌った。

一方、演劇においては、85年つかこうへい、93年の平田オリザの韓国語公演を経た後に、99年に韓国における日本語の演劇公演「売春捜査官」（つかこうへい）が許可された。今回で12回を数える馬山国際演劇祭においては、91年から日本の劇団が参加しているが、日本語公演が公式の場で認められるようになったのは、ここ一、二年のことである。それゆえ、今回の織茂さんによる公演も、日韓の大衆文化交流に少なからぬ役割を果たしたといえる。演劇祭を主催した劇団馬山のイ・サンヨン（李相龍）団長によると、来年はさらにアジア演劇交流の輪を広げ、中国の劇団の招待を検討しているとのことであり、また李団長からは中国の現代劇（話劇・新劇）の状況を尋ねられた。

マサンからの帰路は、プサン（釜山）のキムへ空港から福岡空港を経て名古屋へ戻ることになった。飛行機に乗るとすぐに熟睡する癖のある私は、座席シートを後ろに倒そうとすると、座席を元の

位置に戻すようにとのアナウンスがされた。すでに飛行機は対馬海峡を越えて着陸態勢に入っていたのである。福岡空港に到着した時、時計をみると、プサンを出発してから30分も経過していなかった。

「あまりに近すぎて、あまりに知らなすぎる」日韓相互の文化交流の雪解けは、織茂さんのように、人と人の交流がら始まることをあらためて痛感した。2000年8月に予定されている韓国のテグ（大邱）における織茂秀子さんの公演に期待したい。



オ スジョン

映画広告『오!수정』(韓国映画)『Shall We ダンス?』(日本映画) (ソウル江南シティ劇場、2000年6月)



韓国文学史上最大の話題作と言われる『太白山脈(全10巻)』の日本語約が昨秋出版されている。

チョ・ジョンネ ユン・ハクジュン
<趙廷夾(尹学準監修、川村湊校閲、筒井真樹子他訳)『太白山脈』集英社、1999年10月~2000年6月:原作『태백산맥』全10巻、1986>。韓国では出版以来500万部をこえる超ベストセラーとな

り、貸本屋なども含めると国民の半分に相当する2000万人が読んだと言われる。また1994年には映画化され、日本のNHK・BS放送でも字幕入りで放映された。監督は「族譜」「曼荼羅」「シバジ」「アダダ」「風の丘を超えて——西便制」「祝祭」など
イム・グオンテック
で有名な世界的映画監督・林権澤氏。

実は今回この場を借りて、アジア・韓国・日本の歴史と文化に興味を持つ学生諸君に、この『太白山脈』の小説なり映画なりを是非すすめたいと思って筆を執った次第である。

〔二〕

ところで、この作品が韓国で上のごとき話題と評判をよび日本語にも翻訳されたのは、この小説の主題が1945～1953年頃という韓国史の言わば「謎多き時代」を扱っているからである。しかもこの8年間は、アメリカ・ソ連・中国・北朝鮮・韓国そして日本が深くかかわり、その点では同時に世界的レベルでの「問題多き時代」であった。

では、この1945～1953年とは一体どのような時代であったのか。この点を、当時の南朝鮮（韓国）
ボルギョ
の南部地方にある筏橋という農村の視点から、小説という具体的形式を借りて描こうとしているのが『太白山脈』に外ならないのである。本書の日本語訳、第一巻の表紙カバーには「封印された歴史が今、解き明かされる！！」と、ジャーナリスト的な見出しが附されているが、これは決して誇張ではない。"1945 1953年とは一体どんな時代であったのか"というテーマに対し、歴史を歪曲せず良心的に答えた韓国人の多くは、「活動停止」「逮捕」「投獄」されて来たからである。例えば、「このテーマ」を論説形式で描いた最も秀れた
イ・ヨンヒ
作品<李泳禧（高崎宗司訳）『分断民族の苦惱；韓国現代社会叢書1』御茶の水書房、1985>があるが、韓国の代表的ジャーナリストであり、かつ漢陽大学新聞学科教授も務めた著者は、まさしく「このテーマ」に対する正しい見解公表の故に「活動停止・逮捕・投獄」され続ける。朴正、全斗煥、盧泰愚と三代にわたる軍事政権下では別に珍しくもない現象であった。韓国近・現代史の雄、高麗

カン・マンギル
大学姜萬吉教授も同じ経験をしてこられた。

〔三〕

改めて問いたい、「1945 1953年とは南朝鮮（韓国）にとってどんな時代だったのか」。第一にそれは、日本定刻の植民地から開放され（1945.8.15）、同一民族による朝鮮戦争が終結（1950.6.25～1953.7.25）するまでの時代であった。皮肉なことに、日本にとっての「終戦記念日」はアジアの多くの国々にとってと同様、韓国でも「祝祭日」である。8月15日は「開放記念日」「光復節」と称され、会社も役所も学校も休み、家々やアパートには国旗が立てられる。1945年8月15日、日帝植民地の終結と開放を朝鮮半島は歡喜し、「万歳!」を連呼しながら街々をねり歩いた。目の前に民族の独立と自由を見ることができたからである。ところがその後、気がついてみると民族は南北に分断され、しかも北が南を侵略し数百万人の死傷者を出す朝鮮戦争（韓国では一般に「6.25」と、
ユ・ギオ
1950.6.25の日付で呼ぶ）が始まるのである。1945～1953年とは先ず第一に、開放から朝鮮戦争までの時代だったのである。

第二に、では上の「～から、～まで」の間には何があったのか、ということになろう。「万歳!」を叫んで街をねり歩いたその10日後、アメリカ軍は
インチョン
仁川に上陸し、北緯38度線に基づく米・ソ両軍の分割占領を発表し、同9月7日アメリカ軍司令部は南朝鮮（韓国）に軍政をしきこれを支配する旨を布告する。つまり韓国は1945～1948年までの3年間、米軍政府の支配化に置かれ、しかもソウルの北方数10キロ以北はソ連軍に統治される共産主義国家北朝鮮が同民族分断国家として横たわることとなる。いわゆる東西冷戦構造の犠牲として朝鮮半島は真つ二つに分断される。このあたりは学
ぶた
生諸君もよく知っていると思う。

〔四〕

しかしあまり知られておらず、また意図的に隠された点も多い。上の時代における具体的な韓国人の姿がそれであり、アメリカ軍による軍政の実

イ・スンマン

態、及び初代大統領李承晩の独裁政権の実態とそれに対する抗争事件の数々である。紙面の制約のため、ここではその一部の大枠しか述べ得ないが、まずアメリカ軍政の失策について。米軍政は、こともあろうに日帝植民地時代のいわゆる「親日派」を軍と警察と政府と経済面の重要なポストにことごとく復職させた点。「親日派」とは、日帝植民地時代に日本人の手先となり、同一民族である韓国・朝鮮人を苦しみ搾取した者たちに韓国・朝鮮人がつけた名である。「親日派」は富と地位と安定を得るため、日本人とツルんで、韓国・朝鮮人を支配し敵に回した者たちであり、人数的には警察分野に一番多く、地主や国会議員の大多数もそうであった。彼らは日帝と戦う独立闘争の志士たちを捕え、思想統制を行ない、日帝植民地化に積極的に参加しこれを推進させた。上述の李泳禧氏は、およそ植民地国家というものは解放後はそれに協力した者達を現職から退かせ、そうして新しい体制を打ち立ててこそ真の独立に向かうはずだと述べている。「解放」後、日帝の手先となった「親日派」たちは逃げまどい保身に苦慮する。ところがアメリカ軍政は、彼らの大部分を元の職につかせ、逆に独立闘争の志士たちを排除したのである。民心がアメリカ軍、および当時の政府から離れるのは当然である。そのため南の知識人や良識派の多くの人々は反・米、つまり共産主義をむしろ思想としては受け入れてゆくのである。『太白山脈』でもこうした人物、つまり日帝の手先となり、次は米軍の手先となり富と名誉と地位を確保し続ける人物が登場する。——そして何よりも当時の「良心」とも言える中道派も描いている。小説の中では主人公と目される人物「金範佑」^{キム・ボムウ}。中道派は現実の歴史では、金九氏に代表される。彼らはアメリカ対ソ連中国というイデオロギー対立を否定し、共産主義もアメリカ型自由主義も退け、従って南北分断それ自体に反対する勢力であり、朝鮮半島全体の統一と朝鮮半島独自の政体を願った「良心」たちである。北の金日成にはソ連と中国というバックがあった。しかし金九先生には代表される中道派には何のバックもない。従って現実

の政治の舞台では始めから勝目はない。彼らを中道派と呼ぶのは、アメリカ派でもなくソ連派でもなく、「朝鮮民族全体の独立と統一政治」を願ったというまさしくその故であった。

〔五〕

李承晩政権下、少なくとも100万人の韓国人が「アカ狩り」の名の下に粛清・虐殺されたことが今日の勧告では公然と言われ始めた。北の金日成政権下では、おそらくこれをはるかに上回るであろう。これが朝鮮半島の1945年以降の実態の一部である。無力な中道派の良心はことごとく打ち碎かれ、そのみがその多くは李承晩・金日成政権下の粛清・虐殺の対象とされてしまった。金九先生の暗殺は、その象徴にすぎない。——しかし今や、ソ連が崩壊し、南北統一が叫ばれる状況下において、この時代の良心・中道派こそが再び顧みられるであろう。何故ならば、南北に共通する政治思想体系は、まさしく南北を超越しようとした金九中道派にその歴史的原型を認めるからである。卑近な表現を用いれば、何らかの意味での南北統一後のスーパースターは金九先生しかいないのである。かくして「1945～1953年をどう見るか」という問いは、一つの歴史的認識にかかわる問いであり、今も朝鮮半島が背負い続けている問いなのである。小説『太白山脈』は、そのことを私たちに伝えてくれる。



小説「太白山脈」